

# ふるさとの昔話

財産家の娘に取付いた

## 清勇の狐



語ってくれた人  
山本登喜夫さん  
(72歳)  
中里一丁目

むかし、赤淵川が沼にそそいでいた場所は、今の清勇というところで、樹木がうっそうと茂り、沼では一番魚の釣れるところだった。しかし、土手には狐がたくさんいて人が魚を釣っていると、後ろに置いてあるピクごとさらっていくことが度々あった。

### 狐汁にでもするか…

ある日、清勇近くの村の、源助という百姓が釣をしていた。この日は、特によく釣れ、ピクがいっぱいになったので、「さて、帰ろうかな」とピクの中を見ると空っぽ。「ハーン、狐の仕わざだナ」と思ったが知らんぷり。また、釣を始めると、黒いものが「サッー」とピクの中へ。源助は「それっ」とばかり、ピクのふたを縄で締めてしもうた。家に帰ってから、「さて、狐汁にでもするか」と仕たくをすると、「助けてくれー、これからは悪さはしないから……」。狐が泣きながらいうので、源助は「それな



この附近には昔たくさんの狐が…

ら、この村から姿を消したら助けてやろう」といって放してやった。

すると、この狐は川向こう（今の富士川）の財産家の娘に取付き、その娘は病気になってしもうた。

いくらお医者さんに診てもらっても治らず、そこで神主さんにみてもらったところ、娘さんには狐が取付ており、その狐の一番恐いのは、川向こうの源助さん、ということがわかったそうだ。

家の人たちは、さつそく源助さんを連れて来て、娘に会わそうとした。

ところが、源助さんが家の戸口まで来ると、娘はあわてて逃げたかと思うと、バツリとその場に倒れてしもうた。そして、狐は娘から逃げ、その娘は、元気をとり戻したとサ。

### 地名の由来

吉永



明治22年3月1日西中東比奈村・富士岡村（江戸時代は宗高村）・間門村・鶴無ヶ淵村・石井村・桑崎村の八カ村が合併して吉永村になりました。

吉永という名は、天正2年7月5日付の武田信玄からの文書に、吉永郷と書かれていたので吉永という村名にしたもので、随分古くからの地名であることがわかります。



### 人々の生活

まがたま  
勾玉(東坂古墳出土)

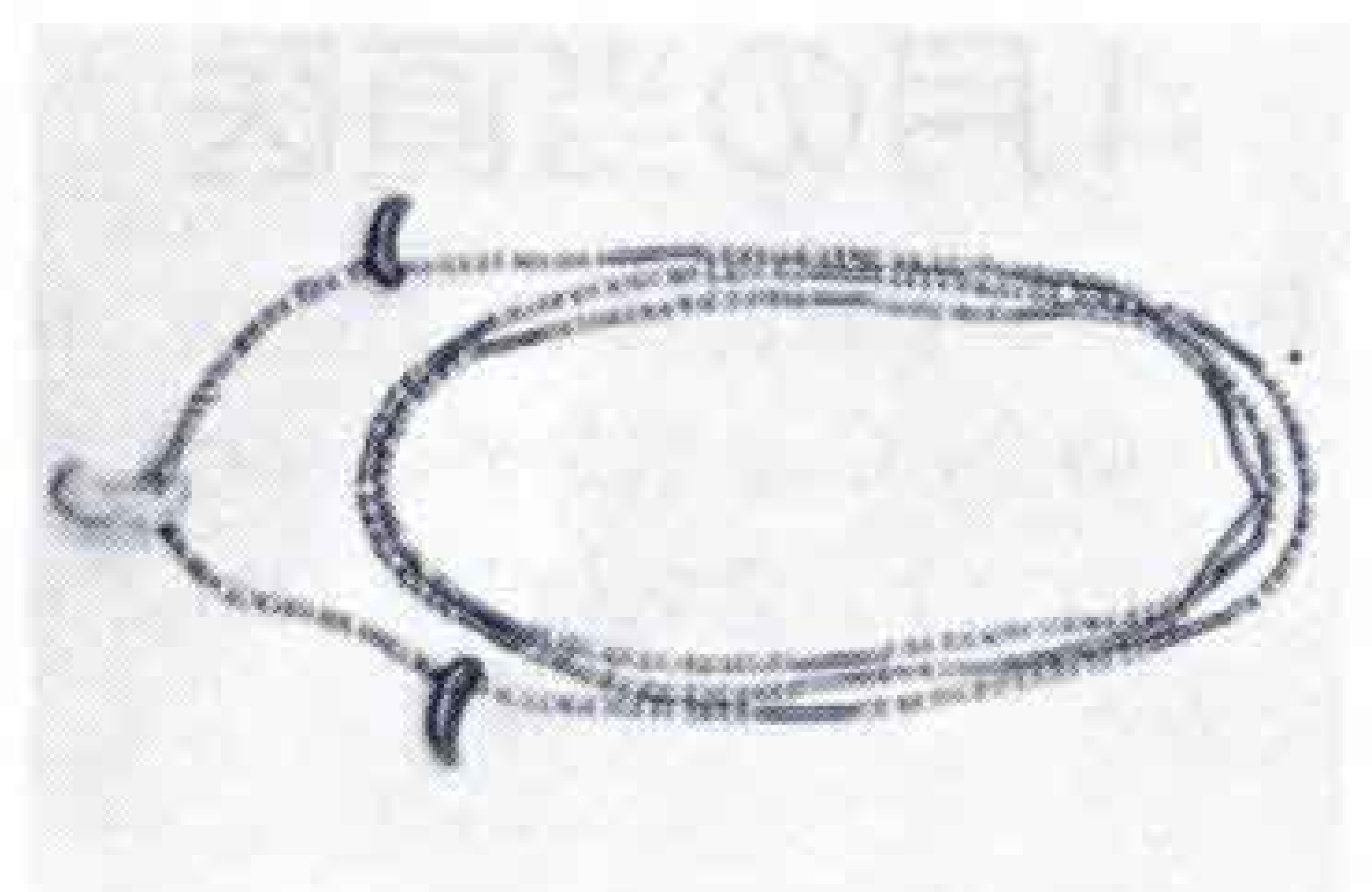


愛鷹山南麓に延びる台地上には、5世紀ごろ造られたと考えられる東坂古墳があります。この古墳は、昭和33年に調査され、鏡・石釧などと共に勾玉・管玉・白玉・小玉などが出土しました。

これらの玉類は、蛇紋岩やガラスなどから作られていました。勾玉は縄文時代中期(約5,000年程前)にもみられ、動物の牙・土・石などによって作られています。古墳時代(約1,500年程前)になると蛇紋岩・瑪瑙・水晶・琥珀など、美しい緑色に近いものが好まれたようです。

これは、緑を生命力の色とする古代信仰に基づくものといわれています。また、その形は人間の臓器であるとか、昆虫を模倣したとする説があるようです。

人物埴輪の男女の頸には他の玉類と共に、頸飾として使われていることから、その用法がわかりました。



東坂古墳出土のくび飾り